

## 審査の結果の要旨

氏名 木村 優

本論文は、中等教育において、教師が授業中に経験し表出する感情に焦点を当てることによって、教職の専門性を情動実践の観点から分析検討したものである。論文は4部9章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、教職専門性の研究において、教師の授業中の感情経験がこれまで検討されてきていない点を指摘し、教師の感情に関する研究動向の整理検討から、教師の感情を「経験」と「表出」の2側面に分け、検討すべき課題5点を導出している。そして第2章では、これらの課題における研究方法と論文全体のアプローチが論じられる。

第Ⅱ部では、授業における教師の感情経験が検討される。第3章では、高校教師への面接調査の質的分析より感情の生起現象モデルを生成し、快感情が柔軟な認知と創造的思考の展開を促進し、不快感情が実践の再評価を通して長期的省察過程を導き教職専門性を促すことを明らかにしている。第4章では、授業目標が異なる2名の教師の、類似状況場面での認知評価様式の比較検討から両者の感情経験の相違を明らかにし、個別独自の主観的感情経験からの省察が教職専門性発達の要因となる点を示している。第5章では、授業中のフロー体験に焦点を当て、生徒へのフロー体験の誘発と協働探究、授業準備と教材研究の充実および授業目標と自己能力の明確化の3条件が教師のフロー体験を導くことを示している。

第Ⅲ部では、感情表出が検討される。第6章では、中学校2名の教師の授業中の自己開示に関する発話内容分析から、教師の自己開示が授業方略の一つとして捉えられることを示し、第7章では3名の教師の自己開示に内在する教師の意図と感情表出様式を検討し、教職専門職としての自律性とケアリングの文化的規範に基づく感情規則に準じて感情を表出していることを明らかにしている。そして第8章では、教師感情表出の社会的機能としての動機づけ機能を生徒への面接調査から明らかにし、高度な専門的判断を行っている点を教師への面接調査から示している。

第Ⅳ部では、実証研究を踏まえ、教師の感情経験と表出に関する理論モデルを提示し、授業中の情動が方略として教職専門性に果たす意義と今後の課題を論じている。

本論文は、教師の専門性を感情の点から初めて取り上げ、授業中の感情経験と表出の意義を記述した点で独自性が高い学術論文であり、これからの教職研究に新たな視座を提示した論文であると高く評価された。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。